

鹿が谷川の流れを慕いあえぐように／神よ 私の  
たましいはあなたを慕いあえぎます。(1)

「鹿のように」(As the deer)で知られる有名な賛美があります。その歌詞は「谷川の流れを慕う鹿のように、主よ、わがたましい、あなたを慕う。あなたこそわがたて、あなたこそわが力、あなたこそわがのぞみ。われは主を仰ぐ」と、詩篇42から取られています。

パレスチナの乾燥した地のように、私の住むコロラドは岩山の山岳地帯で、冬が長く、夏は照りつける日差しで乾燥した土地です。ここに、鹿をはじめ沢山の野生動物が生息しています。渴きを持つた彼らにとって、水は無くてはならないものです。「谷川」と訳されている「ワデイ」は、新共同訳では「涸れ谷」と訳されており、「ワデイ」は「涸れた谷川」を意味しています。雨期には水が溢れています。乾期には川が干上が

り、川底が見えてしまうこともあります。水は十分にないと分かっていても、鹿は水を求め慕いあえぐほどの渴きをもつて水源を探します。

この詩篇の作者は渴きを自覚した人です。「渴く」という経験は、人間の最も深いところにある二ーズと関係しています。詩人は水の枯渴する夏の川床をさまよう鹿に自らの状況を重ね合わせています。「わがたましいよ／なぜ おまえはうなだれているのか。／私のうちで思い乱れているのか。／神を待ち望め。／私はなおも神をほめたたえる。／御顔の救いを。」(6) 神にお会いしたいと、切に慕い求める渴きを歌う詩人にとって、神は無くてはならないお方なのです。この渴きを満たす生ける神は、私たちのいのちの泉、永遠の喜びです。

祈り 主よ、私は渴きを持つてあなた自身を慕い求めます。あなたの愛で私を満たしてください。 SY

どうか あなたの光とまことを送り／それらが私を導くようにしてください。(3)

この詩篇は自分の苦しみを直接神に訴えることから始まっています。詩人はその信頼を矢のように短い言葉に込め、直接的に神に放ちました。主は、放たれた矢文やぶみのような祈りを受け止めてくださるお方です。詩人は神が「光とまこと」である事を思い起こし(2～3節)、礼拝の喜びを再確認し(4節)、自らに、客観的な神の恵みを語りかけて、この詩を終えています(5節)。

さばきを求める叫び(1節)は、主に在る正しい者を弁護してくださいさる神への確信に満ちています。その意味で「正しい者」とは「主のさばきを知る者」と言い換えることができます。しかし、正しい者も苦難に遇います。聖書はヨブ記をはじめ多くの箇所でそのことを教えています(第一ペテロ2・19～20等)。苦しみの中で、主の前に歩

み続けることは容易ではありません。しかし、霊感によって聖書を与えてくださった御霊は、信仰者に詩篇の祈りを与え、ダビデの模範を示し(第一サムエル24・15、また詩篇18篇表題と全体参照)、主の十字架に至る姿を仰ぎ見るよう教えておられます。苦しみの中でも、そうしたものに目を向けること、それが主の「光とまこと」によって導かれる生涯です。そのようにして、私たちは主の祭壇の前で、賛美と礼拝の交わりが与えられ、十字架の恵みを確信するのです。

私の祈りは苦しみの時、神に向かつて真つ直ぐに放たれているでしょうか。周りのものや自分自身ではなく、天から注がれる光とまことを私は見つけて歩んでいるでしょうか。

祈り 愛する父よ、あなたこそ私の光です。苦しみの時にも、私はあなたに「我が光よ」と告白します(詩篇36・9)。

自分の剣によって 彼らは地を得たのではなく  
 ／自分の腕が 彼らを救ったのでもありません  
 ン。／ただあなたの手 あなたの御腕／あ  
 なたの御顔の光が そうしたのです。／あなた  
 が彼らを愛されたからです。 (3)

アメリカの独立記念日が近づき、アメリカの建  
 国を思うとき、3節の御言葉の通りだと感じま  
 す。13の英国植民地は本国からの独立を目指しま  
 したが、当初は民兵以外の軍隊を持たない植民地  
 側は、大きな軍事力を持つ英国に押されていまし  
 ました。やがて、ジョージ・ワシントンを総司令官と  
 する大陸軍が結成されましたが、当初は紙の上だ  
 けのもので、実体がありませんでした。大陸軍は  
 徐々に整えられていきますが、兵士が増えても武  
 器や弾薬が不足していたため、ゲリラ戦で戦うし  
 かりませんでした。そんな大陸軍が英国に勝利

し、アメリカ合衆国が誕生したのは、彼ら自身  
 の力によるのではなく、ただ神の「御腕の力」と  
 「御顔の光」でした。

44篇は、イスラエルがモーセに導かれエジプト  
 を脱出し、神ご自身が王である祭司の国を建てた  
 ことも、ヨシユアに導かれてカナンの地に定着し  
 たことも、神の恵みであると歌ったあとで、その  
 恵みを失っている現状を嘆き、神に助けを祈って  
 いる詩篇です。この詩篇の祈りは、「独立宣言」  
 から250年近く経とうとしているアメリカのため  
 の祈りでもあると思います。アメリカは今こそ、  
 「御腕の力」に頼り、「御顔の光」を求めなけれ  
 ばなりません。  
 祈り 主なる神よ。あなたがこの国を愛してお  
 られることを、私たちが人々に知らせることが  
 できるようにしてください。

「試し読み」はここまでです。

お気に入りでしたら

ご注文ください。



Penguin Club

[www.penguinclub.net](http://www.penguinclub.net)